追手門学院大学 基盤教育論集 第5号（2018）ISSN 2188-4536

考え、表現し、発信する学生を育てる 追手門学院大学 ライティングセンター　現況と課題

梅　村　　修

Achievement and Issues of Otemon Gakuin University Writing Center

Osamu Umemura

【キーワード】ライティングセンター、個別指導（チュータリング）、学生チューター、研修、運営会議、予約システム、セミナー、授業との連携、キャンペーン

1. 追手門学院大学ライティングセンター設立の経緯、および開設の趣旨

2017年4月、「追手門学院大学ライティングセンター」（以下、本センターと略称）が開設された。発足に先立って、福島一政副学長が、LIBERTAS（第73号）誌上に「日本語運用能力の向上を通じて『学力の三要素』の養成につなげる～ライティングセンター開設の狙い～」という文章を寄せて、開設に至る背景と概要について紹介しておられる。その中には、本センターが、

（1）日本語の文章作成を通じて、文部科学省が示した「学力の三要素」を養成すること

（2）Writing Across the Curriculum の理念に基づいて、4年間の学士課程を通じてライティング能力の向上を図ること

以上2点がうたわれている。

そもそも本センターの基本構想は、2016年7月、真銅正宏教授（現副学長、当時は国際教養学部改組学長）によって、「追手門学院大学ライティングセンター構想」として練り上げられ、関係者からの意見聴取を経て、同年11月4日「追手門学院大学ライティングセンター（仮称）の設置について（案）」として公にされた。正規の会議体で審議に付されたのは、同年12月8日が最初で、当時の高尾典史専務理事、福島一政副学長、三上剛史副学長、真銅正宏教授、齊藤一誠教授、筆者で、打ち合わせが行われている。その後、2016年12月22日の常任理事会で設置案が検討され、2017年1月16日の教育研究評議会で意見聴取が行われ、原案通り学長が決定した。教授会で「設置及び規程新規制定の件」が報告されたのは、2017年2月14日のことであった。

本センターの使命は、初年次から卒業まで、4 年間を通じて学生のライティング能力を向上させるための企画・運営を行うことである。

開室時間、相談時間は、平日（月曜日から金曜日まで）の 11 時から 15 時（昼休みをはさんだ 2 時間目～3 時間目）、場所は、中央棟 1 階、キャリアアクションコモンズの右隣（旧一貫連携教育研究所）である。

所員は、齊藤一誠教授（国際日本学科 元ソニー株式会社 宣伝部所属）、佐藤伸行教授（経済学部 元時事通信社 記者）、佐藤友美子教授（地域創造学部 元サントリー文化財団 上級研究フェロー）、真銅正宏教授（国際日本学科 日本近現代文学専攻）、高垣伸博教授（国際日本学科 元毎日放送 制作プロデューサー・アナウンサー室長）、泊 吉実教授（地域創造学部 元読売新聞 記者）、豊島眞介教授（国際日本学科 元毎日新聞 記者・編集者）、そして筆者（基盤教育機構 日本語教育学専攻）の 8 人である。事務の所管は教務課、阿部誉紀氏である。

なお、当面、指導の対象は日本語の文章のみで、英語のライティングは含まない（注 1）。

2. 業務内容

本センターの主な業務は、文章能力を向上させるための個別指導（チュータリング）である。対象となる文章は、授業中の課題、レポート、卒業論文、プレゼン原稿、サークルのチラシの文案まで、大学生活全般にかかわるあらゆる文章である。ただし、就活のエントリーシートなどは、就職キャリア支援課の領分と心得て、管轄外とする（注 2）。

副次的な業務としては、ライティングセンター主催のセミナーの開催がある。本稿執筆現在（2017 年 11 月 1 日）、計 5 回のセミナーが開催され、延べ 65 名の受講生を集めた（7 月 18 日 12 名、7 月 25 日 8 名、10 月 4 日 11 名、10 月 18 日 21 名、11 月 1 日 13 名）。これからも、所員でテーマを分担し、本センターの定番企画にしていきたい（注 3）。

1　7 月 24 日開催の教育研究評議会で、6 学部 1 機構の長から、学長諮問案件に対する学部会議、機構会議での審議結果が報告された。その中に、「ライティングセンターという機関名称が、英語の writing 指導を想起させる」という意見があった（国際教養学部）。傾聴に値する意見だが、日本語のライティングに限定したのは経過的措置である。

2　広く大学生活全般にかかわる、あらゆる文章を対象とすることに対して、上の学長諮問案件に対する各学部・機構からの回答の中には、指導対象の学生、およびターゲットとなる文章の種類を、ある程度、絞り込む必要があるのではないか、という意見をいただいた。もっともな意見だが、発足間もない本センターでは、いまだ“正客”が見定められていない。すなわち、本学のどのような学生が、どのようなライティング指導を望んでいるのか、または、どのような層の学生にどのような強制力を働かせるべきなのか、所員一同、捉まえられていないのが実情である。したがって初年度の一年間は、できるだけ間口を広げ、あらゆる学生の、あらゆるタイプの文章を受け付けるようにした。いわば「走りながら考える」模索の一年だった。

3　ここでも、何を目的に、どの層の学生を対象に、どんなテーマでレクチャーなりワークショップなりをするのかが、当然、議論になるだろう。この点も、先の個別指導の在り方同様、まずはとにかく「ミスマッ

3つ目の業務として、本センターが当面の最重要課題に位置付けているのは、学生チューターの育成、そして、それにかかる研修制度の確立である。現在、本センターには、上記のように、長年、日本語指導や「書くこと」を仕事にしてきた8人の専門家が配されている。文筆家、元新聞記者、近現代日本文学の研究者など、おそらく他大学に類を見ない豪華な布陣である。ところが、ほぼ全員、学内の重い役職を兼務し、ライティング指導だけに十分な時間を割く余裕がない。そこで、3、4回生を中心に、比較的文才と意欲に恵まれた学部学生から、自薦・他薦を問わずチューターを募り、後述するような研修を受けさせて、一般学生の個別指導（チュータリング）にあたってもらう態勢を早急に整えなければならない。多忙な所員は、直に文章指導の最前線に立つのではなく、学生チューターの育成･指導･助言をもっぱらにする。すなわち、学生チューターの後方支援に回り、できれば、セミナー開催や研究活動に専心できるようにしたい（注4）。

4つ目の業務としては、日本語の文章を書くことに関する、日常的な啓発活動、キャンペーン活動が考えられる。本学の平均的な学生は、文章を書くことに対して高い関心を持っているようには思えないし、文章を書けないことに対して危機感を強く持っているようにも思えない。このような学生たちに、自分の人生にとって、達意の文章を書くことがいかに大切か、心を込めてまとまった考えを「書き言葉」で伝えることがどれほど重要かを、倦まず弛まず啓蒙していきたい。

当今は世を上げてSNS全盛の時代である。本センターでは、良い文章を書くための「Writing Guide」（書くことの豆知識をまとめた小冊子）の編纂を進めているが、日常的な啓発活動は、ツイッターやメッセンジャーの形式や話法を借用するほうが奏功する可能性が高い。この点についても後述したい。

2－1　個別指導（チュータリング）のポイント

本センターの中心的な業務は、所員および学生チューターによる、個別指導（チュータリング）である。チュータリングについては、次の3つの方針を掲げている。

(1) 書く前に、所員および学生チューターとの対話を通じて、人間的なふれあいの中で、キーワードを拾い上げる作業、文章の構成を一緒に考える作業などをする。すなわち、文章を書くというしんどい作業に、所員および学生チューターが伴走する。

チを恐れず開催してみる」というスタンスで臨む。その手探りのあとについては後述する。

4　学生チューターを文章指導の中軸に据えるのは、単に「所員の多忙」という消極的な理由だけではない。「学生同士の学び合い、教え合い」の風土形成にも一役買っている。Dorothy Leonard-Barton & Walter Swapによると、組織における人材養成のダイナミズムとして、「初心者階級」の技能習得は、その道の「エキスパート」が指導に当たるよりも、直近の過去に自らも「初心者階級」に身を置いていた「見習い階級」が指導に当たったほうが、良く定着するという。

(2)「レポートの書き方がわからない」という白紙の段階から、「完成したけど自信がない」という段階まで、どの段階の文章でも受け付ける。ただし、これは初年度の経過的措置であって、見直す必要があるかもしれない。実際には、個別指導に 40 分という短い時間しか割けないことから、全く白紙の段階からの指導は困難である。

(3) 添削指導はしない。学生はチューターと一緒に文章を真ん中に据えて考える。チューターは良い文章を作るアドバイジングをするのであって、「赤ペン先生」になるのではない。とくに、レポートや卒業論文など、専門に特化した学術的な文章の場合は、門外漢のチューターが内容面まで踏み込んで書き直しを命じたりするのはご法度である。もっとも、基本的な「てにをは」の間違い、係り受けの不対応や主述のねじれ、文章構成の混乱などを指摘する程度のことはあってしかるべきだろう。ただ、それも書き手の気づきを俟つための指摘にとどめるべきであって、手取り足取りの添削は「百害あって一利なし」。学生の主体性を損ない、いたずらに依頼心をあおることになりかねない。厳に慎むべきだろう（注5）。

3. ライティングセンター発足から現在までの動き、課題

以下に、2017 年 4 月、本センター発足から現在（2017 年 9 月 15 日）までの動きと課題について、運営会議、所員による個別指導（チュータリング）、学生チューター養成のための研修プログラム、予約システム、本センター主催セミナー、学内の連携体制、Writing Guideの編纂、広報活動・キャンペーン、施設・備品の 9 つに分けて書き留めておきたい。

3－1　運営会議

「追手門学院大学ライティングセンター規程（2017 年 4 月 1 日制定）」の第 7 条には、「センターの基本方針に関わる重要事項、並びに第 3 条の事業に関わる重要事項について協議するた

5　本センターのホームページには、下記のような記述がある。
■学生チューターの仕事
・書かれた文章を「直す」のではなく、書き手を「育てる」のが学生チューターの役割。
・相談に来た学生からどのような悩みを持って訪れたのかを親身に聞くことから始める。
・対話を通して、書き手自身が文章の問題点や修正方法に気付くように導く。
・基本的に添削指導はしない。特別な文才は必要としないが、最低限の研修は受けてもらう。
・相談に来る学生には、あらかじめ書いたものを持参することを推奨しているので、まずはそれを声に出して読むところから始めよう。
■学生チューターのメリット
・教えることは、最大の学び。自らの文章表現力を高めるチャンス。
・「傾聴力」が身につく。就職活動を成功に導く秘訣である。
・Student Job の制度を活用する。学内インターンシップの一環と考えてほしい。

めに、追手門学院大学ライティングセンター運営会議を置く」と定められている。本条項に基づいて、2017 年春学期中には、計 6 回の運営会議を開催した。開催場所は中央棟 1 階のライティングセンター、時間帯は主に木曜日の昼休みを利用した。第 1 回目から第 6 回目までの運営会議の主な議案は下記の通り。

・第 1 回運営会議（5 月 11 日）
　学内広報の進捗報告、施設・備品等の整備の状況報告、文章指導の現況報告、次回運営会議までの動きについて
・第 2 回運営会議（6 月 7 日）
　学生チューターの育成・研修プログラムの策定について、文章指導の現状報告について、「Writing Guide」の作成について、5 号館の学内広報について、予約システムについて、共通アカウントについて、学内の連携体制について、施設・備品等の整備について、ノートテイキングの対応について
・第 3 回運営会議（7 月 5 日）
　ライティングセンター主催セミナー・ワークショップについて、ライティングセンター予約システムについて
・第 4 回運営会議（7 月 13 日）
　チューター育成の件について
・第 5 回運営会議（8 月 3 日）
　セミナーの報告・意見交換について、学長諮問案件について、チューター研修の短期集中実施の方策について
・第 6 回運営会議（9 月 8 日）
　秋学期セミナーの内容と日程について、授業との連携について、チューター研修について、2018 年度授業計画について、Bridge 掲載記事について、旧学習支援室「ピアサポーター」について、2018 年度事業計画について、大学 HP 掲出について

以上のように、春学期間は、ハード面では、計 6 回の運営会議の開催、パンフレットの作成、ライティング指導に必要な備品の購入や借入、予約システムの稼働、そしてソフト面では、学生チューターの掘り起こしや研修制度の検討、セミナーの開催など、両面の整備について、進捗の報告や懸案事項の審議を重ねた。

運営会議の課題は、所員の多忙から、なかなか 8 人が顔をそろえることができないことである。メーリングリストを作成して、意見交換を頻繁にしていくしかないと考えている。

3－2　所員による個別指導（チュータリング）

4 月の開設から 11 月 1 日現在まで、本センターで所員から何らかの文章指導を受けた学生の延べ件数は、チューター指導も含めて 148 件である（注 6）。

40 分間のチュータリングの流れは、おおよそ以下のように進められる。

まず、相談に訪れた学生に、学部、学籍番号、利用の目的、何回目の利用か等を、「受付シート」へ記入してもらう。チューターは面談前に、過去の個人ファイルを読み込んで、事前に相談情報を頭に入れておかなければならない。

つぎに、書き手に自分の文章を音読してもらう。音読してみて、つっかえるところはたいていの場合、表現が不適切だったり回りくどかったりする場合が多く、改善が必要である。チューターは音読を聞きながら、誤字・脱字から構成まで、タイプに応じて、当該文章のどこに問題があるのかを診断する（詳細は Appendix を参照）。

診断の結果は、一方的な正解の言い渡しにならないように細心の注意が必要だ。チュートリアルは、書き手とチューターの 2 人が対話の中で作り上げていくものである。チューターは、書き手の思いを尊重し、長所を発見してほめることに心がけ、改善点は書き手自身に気づかせるように示唆を与える。修正はあくまで書き手にしてもらい、チューターはアドバイスに徹する。

最後に、書き手にアンケート用紙に記入してもらい、アンケート回収箱に入れてもらいチュータリングが終了する。1 回で終わらない場合は次回の予約もしてもらう。チューターは「振り返りシート」に指導内容や課題を書き留め、「受付シート」、書き手が持参した文章のコピー、チュータリングで使ったメモ等といっしょに、個人ファイルに整理してキャビネットに保管する。

個別指導（チュータリング）は、まだ手探り状態である。特定の教員が、特定の学生だけを面倒見ている状況が続いており、全学的な広がりはまだない。もっとも、学生チューターが育成できていない現段階で、わんさと押しかけてこられては対応できない、というジレンマがあるが、それにしても、今少し、広がりがほしい。さもないと、学生実態を把握することや、文章指導のコツを所員間で共有することができず、学生チューターの養成にも支障をきたすと思われる。

3－3　学生チューター養成のための研修プログラム

学生チューターの発掘と育成は、本センターに課された喫緊な課題である。日常的な相談業務が円滑に運営されるか否かは、ひとえに、優秀な学生チューターをたくさん確保できるかど

6　名桜大学は、1 年の準備期間の後、2016 年度からライティングセンターが開設されたが、初年度は 241 件の文章指導が行われたという。

うかにかかっている。

早稲田大学や関西大学など、ライティング指導に実績を持つ大学は、もっぱら大学院生が研究の傍ら、学部生のチュータリングに当たっている。本学にも研究科はあるものの、質量ともに多くを望めない状況である。いきおい、学生チューターの候補生は、学部上回生（3・4 年生）にならざるを得ない。

幸い、本学には、OLS や入学前教育などの取り組みの中で、学生同士の教え合い・学び合いの気風が育ちつつある。また心理学部にはカウンセリングやコンサルティングに関心を寄せる優秀な学生も少なくない。さらに、昨年（2016 年）度から Student Job が制度化され、予算措置を講じる準備もある（注 7）。

学生チューター候補者は、2017 年 11 月 1 日現在、豊島教授の「日本語表現」や「プロジェクト（記者入門プロジェクト）」の履修生から 2 名、課外活動の縁で筆者が見出した 2 名の名前が挙がっている。また、旧学習支援室の「ピアサポーター」の学生の参入も見込まれている（4 名）。さらに、センターに相談に訪れた学生やセミナーに参加した学生の中から、チューターになりたいと申し出ている学生もいる。

秋学期からは、早速、彼ら候補者を対象に、チューター育成に着手した。研修は週 1 回（90 分）× 4 回の短期集中研修。研修内容は、大きく 3 つ。一つ目は、社会人基礎力～時間管理、約束の履行、マナー等～の養成、2 つ目は、カウンセリングやコンサルティングのスキルや態度の養成、3 つ目が、ライティング指導に欠かせない的確な文章診断力の養成である。

書かれた文章を直すのではなく、書き手を育てるのがライティング指導の基本だから、チューターには、学生たりとも、文章表現のスキルだけでなく、教育者としての懐の深さが要求されるだろう。

的確な文章診断力養成のための研修内容については、本稿の Appendix に豊島教授が作成された「チューター養成講座（案）」「日本語上達のために」「学生チューター必携テキスト（案）」を掲載したのでご参照いただきたいが、ここでは、かいつまんで要点だけを記しておきたい。

的確な文章診断力養成のための研修内容は、大きく講義と演習と実習に分かれる。

講義は、現代日本語の成り立ちや特徴など、日本語についての基礎知識、「書くこと」の心

7　名桜大学が本学の良い先達である。名桜大学では、1 年間の準備期間を経て、2016 年度に学生会館 SAKURAUM の中にライティングセンターが設置された。名桜大学でも、学部上回生のチューター（先輩学生）が 1 年次必修科目（全学必修科目「アカデミックライティング I」と学長講座「大学と人生」。両科目ともレポートを学期中に 1 回～3 回提出することが義務付けられている）のレポートを対象にアドバイジングを行っている。学生チューターには、各学期に、他の学習支援センターとの合同の研修を 4 コマ、センター独自の研修を 8 コマ、さらに毎週 1～2 コマの研修を実施したという。研修内容は、チュータリングの基礎知識と技術、センター運営、チュータリングの基本＋応用などだ。以上、名桜大学の木村堅一先生からのご教示による。

構え、生き生きとした文章を綴るための要諦、学生チューターの仕事内容などのミニレクチャーである。

演習は、新聞の社説を 1 ／3 もしくは半分に削る「削り方教室」（@豊島教授）、バラバラにした新聞コラムを意味の通る論理的な文章に組み立てなおす「並べ替え教室」（@真銅教授）、舌足らずな表現を補足して達意の文章に仕上げる「膨らまし教室」（@真銅教授）、新書一冊を速読して書評をかく「新書イッキ読み教室」（@梅村）、インタビューを通して質問力を磨く「つっこみ教室」（@梅村）など、多彩なトレーニングを用意している。

実習は、実際の作文の問題個所を赤ペンで指摘し、所員から個別指導を受ける「文章診断実習」、チューター候補学生同士で文章指導の手順に沿ってチュータリングをする「模擬相談実習」、研修に参加した学生同士でざっくばらんに問題点や改善点を話し合う「座談会」などを用意している。

なお、運営会議の中で、ライティングセンターの学生チューター業務を本学の Student Job 制度として登録するにあたり、オープンキャンパススタッフなど、他部署での Student Job 制度との平準化を図る必要があることが指摘された。そこで、他部署での Student Job 登録のための研修内容や時間等について、阿部誉紀氏が調査をした。その結果、Student Job 登録にあたっては、研修の回数や研修内容に特に定めはなく、上記の研修プログラムがきちんと履行されれば、Student Job 登録に値する学生と見なしてよいことがわかった。

学生チューター養成のための研修プログラムについては、豊島教授の尽力に負うところが大きい。秋学期から毎週 90 分× 4 回を研修に充て、12 月 18 日現在、3 クール回したが、社会人としての常識やコンサルティングの要諦などは、事務職員や心理学部の教員の協力も仰ぎたいと考えている。

3－4　予約システム

2017 年 6 月 30 日（金）、情報メディア支援課の協力を得て、ライティングセンター予約システムが開設された。予約システム本格稼働については、早速、UNIPA 配信を通じて全学生に通達した。また、予約システムの使用方法（マニュアル）も同時配信した。

予約システムは、学生が使用する UNIVESAL PASSPORT のログイン画面のページ中央からログインできるように設定されており、PC からもスマホからも容易にアクセスできる。学生が利用予約をし、担当チューターとのマッチングが首尾よくいった場合は、当該学生の HARUKA メールに予約完了メールが送信される。学生はそれを見て、所定の時間帯にライティングセンターで個別指導を受ける。

ときに、1 人の予約に対し、複数名のスタッフが担当可能な場合があるが、当該学生が 2 回

目以上利用の場合は、前回担当したスタッフが原則として担当することとし、初めて利用する学生の場合は、当該週の指導回数が少ないスタッフが担当することになる。すなわち、担当スタッフの指導回数に偏りが生じないよう調整して運用する。

担当教員は、月曜日から金曜日の2、3時間目にシフトが組まれているが、システムの仕様により、週単位でシフト調整を行うこともできる。また、本センター開室時間外やシフト時間外での対応については、センターの利用自体は可能だが、予約システム上の記録や利用統計に影響が出るので、予約システムの中では扱わない。予約システム稼動以前のノート（手書き）による利用記録を使用することとなった。

予約システムが本格的に稼働したら、千客万来して所員だけではさばききれないのではないか、と懸念された。しかし、幸か不幸か、杞憂に終わっている。予約システムが宝の持ち腐れにならないように、本センターの周知を徹底し、授業との連携を強め、学生の賑わいを作り出していかなければならない。

3－5　ライティングセンター主催セミナー

7月13日の学部・機構会議で「ライティングセンターの今後の展開について」という学長諮問案件（注8）が審議された。7月24日の教育研究評議会では、その結果が各学部長、機構長から報告された。報告の中で、複数の学部から「文章表現のテクニック以前の文章作法の基本がわかっていない学生が散見される。そのような学生には、学生チューターではなく、ライティングセンターの担当教員が直接指導してほしい」、「ライティングの技術指導のまえに、読み手の気持ちを考えて、丁寧に文章を綴る態度や習慣を身につけさせてやってほしい」という要望や意見が寄せられた。

たしかに本学の学生の中には、書きなぐったようなミニッツペーパー、誤字や脱字だらけの作文、読点や段落改行が一切ないレポート、係り受けの不対応や文体の不統一に無頓着な論文等を、平気で提出する者が少なからずいる。このような学生たちは、おそらく「書くこと」への興味も、「書けない」ことへの危機意識も乏しいだろう。彼らは、どんなに呼びかけても、

8　(1) ライティングセンターへの要望
全学的なライティングセンターの活用にむけて、学部・機構からライティングセンターに期待する取り組みについてご報告いただきたい（例えば、現行の個別ライティング指導のほか、セミナーやワークショップの実施など）。
(2) 学部・機構での「教えることを通じて学ぶ」取り組み
ライティングセンターでは、学生チューターが「教えることを通じて学ぶ」体制を構築していきたいと考えている。学部・機構に「教えることを通じて学ぶ」先進的な取り組みがあれば、ご報告いただきたい。
(3) 授業科目と連携したライティングセンターの活用
ライティングセンターと連携して展開できそうな学部･機構の授業科目があれば、ご報告いただきたい。

予約システムに登録し、チュータリングを受けようとはしないだろうと思われる。

本センターでは、チュータリングは、できれば基本的に、「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず（『論語』述而篇）」（自分で考えて問題を解決しようとする意欲が湧かなければ、その者を教え導くことはしない。どう表現してよいかと悶々としていなければ、教え導くことはしない）の態度で臨みたいと考えている。学生には、自分が書いた文章の問題点に気付く体験、言葉で表現できない鬱屈が晴れた体験、論理の道筋が見通せた体験などを、チューターとの対話の中で味わってほしい。

とはいうものの、基本的な文章作法が身についていない、「書くこと」に不慣れな多くの学生を放置しておくわけにもいかない。

そこで、2017 年度秋学期から、「書くこと」への関心を高め、「書けない」ことへの危機感を醸成するセミナーを開催することになった。目標は、「分厚い中間層」に相当する学生たちに、その“躓き”を自覚させ、文章力の底上げをはかることである。

先述のように、12 月 14 日現在、すでに 8 回のセミナーが開催された。隔週で行われ、テーマは次のようなものである。

第 1 回　レポートお助けクリニック 1
第 2 回　レポートお助けクリニック 2
第 3 回　書けないことは怖いこと。文章力が要るワケは？
第 4 回　本当は怖い、書き間違いや読み間違い
第 5 回　「係り」と「受け」の不対応について
第 6 回　日本語の仕組みを眺めてみよう
第 7 回　文章の書き分け～話し言葉で書いていませんか？～
第 8 回　簡潔な文章を心がけよう
（第 9 回　「は」「が」で学ぶ日本語文法）

3－6　学内の連携体制

ライティングセンターの事業を活性化していくには、学部・機構の教職員との連携強化が欠かせない。7 月 13 日の学部・機構会議で、授業科目と連携した本センターの活用、連携して展開できそうな学部・機構の授業科目について審議され、多くの提言を得た。たとえば、新入生演習に学生チューターを招く、授業内で課した文章を学生チューターにチェックしてもらう、などである。すべて提言にとどまり、まだ実現していない。

最大の課題は、「書くこと」に対して特段の興味も関心もない、「書けない」ことに取り立てて焦燥感を抱かない、そのような学生をどうやって、本センターの取り組みに巻き込んでいく

か、である。

一つの手立てとして、先の提言のように、授業科目との連携が考えられる。例えば、「新入生演習」や「日本語表現」や「コミュニケーション演習」では、授業中にレポートやミニッツペーパーを書かせることも多い。履修生の中からライティング能力が低い学生を選び、セミナーへの参加を奨励する。また、GPA 値が重視されているスポーツクラブ系の学生の参加を半ば義務付ける。ともあれ、なんらかの強制力が働かないと動員は難しいので、授業科目の担当者を交えて、話し合いの場を設けたい。

また、各授業担当者から、学生チューター候補者を推挙していただきたいと思っている。授業中に書かせるミニッツペーパーの中には、ときどきユニークな言葉の冴えを感じさせるものがある。記号やイラストを交えて見事なノートが取れる学生もいないわけではない。そういう学生をぜひ本センターに紹介していただきたい。2016 年度から学部上回生によるライティング指導を進めている沖縄の名桜大学でも、学生チューター候補者の選定は、全学への一般公募とは別に、予めライティング科目や個別の授業で目をつけた学生に教員が声かけして“一本釣り”をしているとのことである。

学生チューター候補者への研修プログラムにも、学内の人的なリソースを活用したい。先述のように、研修プログラムには、的確な文章診断力の養成に先立って、社会人基礎力の養成や、コンサルティングのスキルや態度の養成が必要である。そのための研修を、本センター関係者以外の学内の教職員に依頼することはできないか。たとえば、時間管理や対人マナーについては就職キャリア支援課の職員さんに、傾聴のトレーニングについては心理学部の教員や学生相談室の専門家にお願いできたらいい。

旧学習支援室のピアサポーターや広報室の学生企画広報スタッフ（Bridge スタッフ）との連携も考えられる。ピアサポーターは学生同士の学び合い、教え合いを活動の中心においているから、ライティングセンターとも親和性が高い。また、学生企画広報スタッフの中には、記事を書くことに興味を持っている学生がいるに違いない（注 9）。彼らに本センターの学生チューターになってもらうのである。

そのほかに、「思わず笑顔になる文章コンテスト（旧「青が散る」Award）」と連携して、学生に「書くこと」のインセンティブを高める活動も考えられる。国際日本学科の日本語能力育成科目群（仮称）との連携、他大学のライティングセンターとの交流、学外の文章表現コンクール等への応募も視野に入れたい（注 10）。

9　学生企画広報スタッフには、毎週木曜日の昼休みと 3 時間目、企画編集会議に本センターを開放している。

10　2017 年秋学期の日本語表現、コミュニケーション演習の授業担当者には、次のような提言をしている。
①日本語表現やコミュニケーション演習の履修生に、月 2 回の本センターのセミナーに参加を促す（もしくは義務付ける）。

3－7 「Writing Guide」の編纂

本センターでは、良い文章を書くための「Writing Guide」（書くことの豆知識をまとめた小冊子）の編纂を進めている。いまだ捗々しい進捗を見ていないが、あまたある「論文やレポートの書き方指南書」と一線を画するような、斬新な内容と体裁を備えた「Writing Guide」が望まれる。

ただ、このようなガイドブックを手に取って、面白がって読むような学生は、本学では少数派である。平均的な学生は、「書くこと」に対する興味も関心も薄い。「Writing Guide」の発行に先立って、彼らを啓発し、「このままではいけない」と思わせるような仕掛けが必要ではないか。たとえば、

- 「ライティングセンタークイズ」と名付けて、学生たちが書いたおかしな日本語を日替わりで構内に掲出する（正解は「ライティングセンターに相談だ」（仮称）というコピーとともに、QR コードで見られるようにする）
- 「書くこと」に先立って「読むこと」に興味を持たせる。そのために、所員が薦める「思わず書きたくなる 100 冊の本」を書評付きで配信する。
- 書くことに不慣れな学生（とくに体育会系の学生）を集めて、定期的に「写経ドリル」や「作文道場」を開催し、その姿を学内外に配信する。
- 「ビブリオバトル」や「朗読・暗唱会」など学生参加型ワークショップを開催して、その活動の様子を学内外に配信する。

3－8　広報活動、キャンペーン



本センターでは、開設以来、学内にその存在を知らしめるための広報活動を展開してきた。

まず、開設に先立って、左の写真のようなリーフレットを作成し、全教職員に配付した。また、4 月には各学部の新入生演習担当教員から履修生にこのリーフレットを配ってもらい、ライティングセンターの趣旨や利用方法を口頭で説明してもらった。また、いろいろなサイズのポスターを作成し、パネルや立て看板に仕立てて、非常勤講師室、5 号館の掲示板、中央棟の階段の踊り場等に設置した。

---

②日本語表現やコミュニケーション演習で履修生に書かせるレポートやミニッツペーパーの中から、ライティング能力が著しく低い学生を選び、ライティングセンターに寄越してもらう。そして、所員が徹底的に指導する。指導済みのお墨付きをもらうまで通わせる。

③ライティングセンターの学生チューターの粒がそろってきたら、日本語表現やコミュニケーション演習の履修生が、ミニッツペーパーやレポートを提出する前に、必ずライティングセンターで第三者（＝学生チューター）といっしょに自分の文章を読み返す習慣をつけさせる。

しかし、学生チューターが育成できていない現状では、所員だけでたくさんの相談者をさばききれない、というジレンマがあった。せっかくセンターを訪ねてくれた学生に十分な指導ができず、がっかりさせる事態だけは避けたかった。したがって、開設 2 か月間の広報活動は、及び腰に終始したことは否めない。

広報活動に力が入り始めたのは、予約システムが本格的に稼働しはじめた初夏のころからだ。6 月 30 日には、全学生のポータルサイトに操作方法マニュアルを配信し、7 月のセミナーの告知も行い、少しずつ学生のにぎわいが生まれつつある。今後は、引き続き、本センターの利用を促進する広報活動やキャンペーンに力を注ぐと同時に、学生チューターの発掘と育成に全力を挙げなければならない。「指導する学生」と「指導される学生」が車の両輪のようにそろって初めて、ライティングセンターの活動は進み始めるだろう。

3－9　施設・備品

施設･備品については、教務課、管財課、情報メディア課等の協力を得て、あらかた整備された。なかでも、予約システムの開設は喜ばしい。また、カラフルな勾玉型テーブル 3 脚とそれに見合った椅子 9 脚、予定記入用の縦型ホワイトボードを新規に購入した。さらに、ノートパソコン 2 台、オンデマンドプリンター 1 台、コピーカード 3 枚、プロジェクター 1 台、Bluetooth 対応スピーカー 1 台、収納用キャビネット、メールボックス、その他、ゴミ箱、掛け時計、文房具等、こまごまとした備品を取りそろえた。なお、センター室内の内装や廊下のラウンジ化についても教務部に要望書を提出しているが、新キャンパスへの移転を控え、経費節減のおりからも、見送らざるをえない。

4. おわりに

福島副学長が冒頭の LIBERTAS の中で書き添えておられるように、文部科学省の最新の調査結果によれば、学生の日本語表現力を高めるための部署を設置している大学は、まだ多くはない。国公私立大学 764 大学のうち 7.7%、大学数にして 59 大学（うち私立大学 40 校）に過ぎない、という（2017 年 3 月現在）。

全国的にはまだまだ数少ない取り組みだが、追手門学院大学ライティングセンターの活動が、本学の学生のライティング能力の向上に貢献し、「学力の三要素」の向上につながれば幸いである。

また、本学の学生のみならず、「書くこと」に特段の関心も興味もなく、また、「書けない」ことにさしたる危機感も抱いていない平均的な日本の若者、すなわち「分厚い中間層」を形成する本邦の大学生に、どのような文章指導が有効かを検証し、発信していけるようなライティングセンターに育てていきたいものだ。

Appendix

追手門学院大学ライティングセンター

チューター養成講座（案）

2017.9 改訂

文責：豊島眞介

2017 年秋学期の半ばまでにライティングセンターのチューターを養成する講座案をまとめました。45 分授業× 2 の計 3 回で詰め込み、4 回目に模擬相談を行います。授業前の宿題として参加者には豊島が作成したテキスト「日本語上達のために」と「学生チューター必携テキスト」を読み込んできてもらいます。

＜第 1 回前半＞文章診断①＝ 9 月 19 日（火）15:00〜15:30

「学生チューター必携テキスト」をもとにアカデミックライティング、エッセーのチェックポイントを確認します。

＜第 1 回後半＞文章診断②＝ 9 月 19 日（火）15:40〜16:30

豊島担当の「日本語ワークショップ」授業で学生が実際に書いた作文をもとに、文章診断の練習をする。ワードで打った教材に赤ペンで問題個所を指摘する。

＜第 2 回前半＞論理的文章の読み込み①＝ 9 月 26 日（火）15:00〜15:40

朝日新聞の社説を題材に半分に削る「削り方教室」にチャレンジしてもらう。通常の要約と異なり言葉を補わないで意味を通じさせる。論理のつながりを意識するための練習。

＜第 2 回後半＞論理的文章の読み込み②＝ 9 月 26 日（火）15:50〜16:30

毎日新聞の社説を 1 ／3 に削るとともに 12 字以内で見出しをつける練習をする。削り捨てていって最後に残るのが見出し。筆者が何を一番訴えたいのかを見抜く。

＜第 3 回前半＞書評の書き方ミニ講義＝ 10 月 3 日（火）15:00〜15:20

豊島作成の「書評の書き方」「新書 1 冊を 30 分で読む法」をもとに、ミニ講義

＜第 3 回後半＞書評作成＝ 10 月 3 日（火）15:30〜16:30

デービット・アトキンソン著「イギリス人アナリスト　日本の国宝を守る」の書評を 800 字にまとめる。文章の読み取り力を身に付ける。時間内に書きあがらない場合は宿題。豊島の以下のアドレスに 6 日（金）までにワード原稿をメール添付で提出。

※豊島の Email:s-toyoshima@otemon.ac.jp

＜第 4 回＞模擬相談＝ 10 月 10 日（火）15:00〜16:30

文章診断の実地練習。400 字の模擬文案を一人が読み上げる間に、チェック項目のどこが問題かを見極める。相談冒頭は必ず模擬文案の「良いところ」を褒めるところからスタート。そのうえで問題点を指摘。改善案を話し合う。

後半は相談者役とチューター役を交代して模擬相談を行う。

梅 村　　修

日本語上達のために

2017.8 改訂

●初めに

日本語をちゃんと書けない、という悩みは今に始まったことではありませんし、誰にでもあることです。この文章を書いている本人（国際日本学科教授）は、半世紀近く前にマスコミを目指そうと心を決めて東京・銀座で大学の大先輩が主宰していた作文教室に 10 カ月間通いました。毎週 1 回の教室前には一晩徹夜して作文を仕上げたものです。それを先生にズダズタに直された上に「これでは 0 点。マイナスにしたいくらいだ」と悪罵の限りを投げつけられ、そこから這い上がって合格点をとれるようになりました。何とか新聞社に合格。赴任先では原稿を書けども書けども「記事になってない」と原稿の束を支局次長にゴミ箱へと叩き込まれる毎日。暗い思いをしたものです。

最底辺から自分なりに考えて、道を開いて、今の私があります。文章力は持って生まれるものではありません。練習を積み重ねて身に付けるものです。そのときにちょっとしたコツを踏まえれば誰でも必ず上達します。そして、一度身に付けた文章力は運転免許と同じです。一生使いまわすことができるのです。

このテキストは、文章力を身に付けたいが、どのようにすればいいのか分からないというあなたのために作りました。一章ずつしっかりと読み込んでください。覚えてください。実践してください。そこからあなたの新しい人生が開けます。

1. 基本のキ

●日本語って何だ

今、私たちが文章を書くときに使っている現代日本語はいつ頃に成立したものでしょう。大きな流れでいいますと、幕末まで書き言葉は文語体で共通していたものの口語（話し言葉）は各地バラバラの方言で、東北地方の人と鹿児島の人では会話が成立しない。明治初めに文部省が標準語を作って話し言葉の基本を作り、国定教科書も作成しました。「おとうさん」「おかあさん」という言葉も文部省が作っています。特に第二次大戦後は、学校では方言はよくないものとされ、標準語で話すように指導されてきました。テレビの普及も標準語が広くいきわたることに効果がありました。先生たちの世代（60 歳代？）が学生時代には東北地方を旅行しても

お年寄りのズーズー弁を全く理解できませんでしたから、ずいぶん変わったものです。

では書き言葉はどのようにして発達してきたのでしょうか。明治初期にそれまでの書き言葉がすべてご破算になって、新しい書き言葉が必要になった。二葉亭四迷らが「言文一致体」を唱えて、徳富蘇峰らが寄ってたかって文章、文体を作ってきた中で、画期的だったのが夏目漱石でした。漱石の文体は恋愛でも外交でもルポルタージュにでも応用できました。万能性を持った文体を手作りで作り上げたのです。同時期の正岡子規も文章日本語を作り上げるのに功績がありました。これが変遷して、「だれが文章を書いてもアメリカの大学の日本語科の試験問題になりうる…という文章が出来上がるのは厳密にいえば昭和 30 年代以後」（司馬遼太郎対談集『日本語と日本人』での司馬氏発言）。

完成してからまだ 60 年。今の日本語は世界的に見ても若い言語なのです。

●日本語の特徴は

日本語の大きな特徴の一つは敬語があることです。尊敬語、丁寧語、謙譲語があります。相手を持ち上げて、遠ざける、一定の距離を保つという効果があります。和をもって貴しとなす。衝突を避けるための潤滑油です。このような敬語は世界的に見て少ないものです。

二つ目は主語を省略すること。作文指導でも、「私は…」と書いている人に削除を指示します。主語がないのは日本語が内輪で話されてきた言葉だからと言われます。源氏物語も主語がない。狭い宮中社会が舞台になっていて、誰が話しているかは文末の敬語で分かる仕掛けになっています。

三つ目は文末で結論が出ることです。最後まで結論が出ませんから、対話していて相手の表情からどうもこちらの意図に賛成ではない、機嫌を損ねるだけだと判断すれば、最後の段階で「…というようなことはありません」とひっくり返すことが可能です。考え方によってはとても便利な言語です。

四つ目は表記に漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字と多様性があることです。読み方でも音読み、訓読み。逆に言えば使い分けをうまくやらないととんでもないことになります。とても「重たい」言語であるのです。外来語を広く受け入れる機能があることを考えると「国際語」としての機能は十分あります。

●達意の文を

文章にはランクがあります。第一段階は論旨に矛盾がなく、事実関係に間違いがない文章です。第二段階は達意の文。広辞苑で「達意」を引くと、「考えを十分に述べ表すこと、意図を

十分に行き届かせること」とあります。十分理解できて納得のいく文章ということです。第三段階は名文です。

名文とは読んだ人に感動を、感激を呼び起こすものです。これを下手に志すと、とんでもない悪文になりかねません。よほど天分のある方以外は目指さないほうがいいでしょう。

私たちが目指すのは達意の文です。言いたいことをわかりやすく言い尽くすことが肝要です。初めは本論、それも一番言いたいところを書き上げてみましょう。そして結論を書き、返す刀で前文作成に戻ります。全部揃ったところでオーバーな表現はないか、事実関係は正確に表現されているかなどを点検して、削除したり校閲をします。

日本語についての基礎知識は以上です。

2. 書く前の心がけ

●テーマが死命を制す

高い確率で自分の書いた投書が新聞の投稿欄に採用されるにはどうすればいいかを若い女性グループに教えたことがあります。講座のタイトルは「必勝投稿術」。そのときに強調したのが今の時代を、世相を反映したテーマを選びなさいということでした。講演したのは 2011 年 4 月。東日本大震災が起きた直後でした。

この時に紹介した投書は二つあります。一つは阪神大震災の時を思い出しての投書。「友人からの段ボールに感謝」という見出しで、「ドラえもんの四次元ポケットみたいになんでも出てくる」と喜ぶ子どもたちの声が実感を持って迫ってきました。もう一本の投書は「計画停電で知った星の美しさ」。「停電して空を見ると星がすごくきれいで美しかったです」と書き出し、「地震は悲劇だけじゃなく、大切なことも教えてくれました」と結んでいます。そうですね。今の大都会ではネオンが邪魔をして星空はきれいに見えません。

このような切り口はとても歓迎されますし大事なことです。この 2 本とも頭で考えて書くのではなくて、ご自分の体験を率直に書いているところがとても好感を持てます。頭で書くのではなくて体で書く。自らの経験を引き出して紡いでいくことが良い原稿につながります。最近、一番楽しかったことは何か、つらかったことは何か、一番感動したことは何だろうか。自分のここまでの人生を決めたことは何だったろうか。具体的に思い起こしてください。「自分史」の簡単な年表を作るのも手掛かりになります。

先に紹介した投書は大震災直後の世相を反映したものでした。今の時代を象徴するテーマを選ぶのはとても大切なことです。新聞、雑誌に何が取り上げられているかをみてみましょう。硬いテーマで書きたいのなら新聞の 1 面トップに何が取り上げられているかをチェックしま

す。軟らかいテーマなら、日経 MJ の 1 面に、婦人雑誌に何が取り上げられているかを点検します。大阪市西区にある大阪市立図書館は各種雑誌を幅広く購入展示していますので、雑誌から今の流行を探るときなどにとても便利でした。皆さんも一度足を運んでください。

そのうえで拾い上げた雑多なテーマを選別します。手あかがついた話ではなく、新鮮なものがいい。「ニュース感覚」が大事です。季節感も大切にしてほしい。生命、家族、教育、自然、選挙、国家…。テーマは限りなくあります。ただ、テーマを選ぶときに、背伸びをすることも、格好をつけることも必要ありません。今の自分の身の丈に合ったテーマを選んで率直に書けばいいのです。取り上げたテーマについてしっかり発言して世の中を変える一助としたいという熱い思いや、こんなすばらしいことがあったという感動を伝えてほしいのです。そのためには毎日、新聞を読んでください。自宅で取っていなければ図書館で必ず最低 1 紙に目を通してください。1 面、社会面、経済面、家庭面…初めは 1 時間は使ってください。そしてわからない言葉が出て来たらすぐに調べる癖もつけてください。

●「つかみ」を大切に

皆さんは徳富蘇峰という人物をご存知でしょうか。ジャーナリストで歴史家。日本の太平洋戦争無条件降伏に猛反対したというと右翼のようですが、戦前のオピニオンリーダーで、大阪毎日新聞・東京日日新聞の社賓でもありました。名文家として鳴らした方です。私の作文の先生はこの流れをくむ元読売新聞論説委員の方でした。私の文章の基本はこの先生に教えていただいたことで成り立っています。その先生に厳しく諭されたのがつかみ、つまり導入部に全力投球しなさいという教えでした。

「入社試験の作文は最初の 3 行が勝負。その 3 行で大体の作文の出来は判断できるものだよ」と、ギョロリ目玉をひんむかれたものです。

私も新聞社の編集局でデスクをしていた時に何度か入社試験の作文の採点と面接を担当しました。最初の 3 行を読んで「これじゃ20 点」と思ったら、最後まで読み通してもやはり 20 点なんです。つかみを大切にしなければなりませんね。

●具体的に…5W1H を踏まえて

文章初心者は往々にして具体性に欠けた文章を書きます。5W1H といいますが、いつ、どこで起きたことかを詳しく書いていくと目の前に情景が浮かんできます。その映像を文章化する、そのように考えてください。2008 年、当時私は毎日文化センターの社長をしていましたが、その傍らセンターで開催していたマスコミ受験作文講座の受講生たちの中から、「あと一押し」

すれば合格するという学生諸君に声をかけて毎週計6回の特訓講座をしたことがあります。「時代」「挑戦」などの題を出して1000字で作文を書かせる。水曜夜に文化センターに来てもらって目の前で添削の朱を入れていく。この目の前というのが大事なのですね。一人ひとり徹底的に手を入れる。一人当たり30分、計2時間かかります。他の参加者がどのようなところを直されているかを務聞くことが大事です。添削が終わると採点します。1カ所でも誤字脱字があると5点引きますから、最初は30点、40店というひどい点をあげることになります。それでも5回目くらいになると60点、70点とれるようになります。

このとき、受講生の一人はインドネシアの親のない子どもたちの収容施設にボランティアにいった経験を書いてきました。ところが作文を読んでもさっぱり情景が浮かんでこない。「そこはどんな地域にあるんだ、田んぼの真ん中か」「天候はどうだった、ときにスコールはなかったか」などと追及して、やっと空港から50キロ北の田園地帯の真ん中にある古ぼけたレンガ造り2階建ての園舎が浮かんできました。部屋の中がカビだらけで、子どもたちがはれものだらけだったこともわかりました。当時の状況を正確に書くだけで人の心を打つことができる。それを身に染みた彼は大手マスコミに合格を果たしました。

●「分かっているつもり」症候群

これは文章初心者が陥るミスです。新聞社でも新人記者がしょっちゅうやってくれます。例えば2台の車が交差点で衝突した事故を取材したとします。衝突にもいろいろなケースがあります。出合頭衝突もあれば追突もある。どんな事故かきっちり取材するには見取り図を描いてもらうか、自分で書きながら説明を受ける。これが一番確実なやり方です。慣れてくると頭の中に図面を描いて質問することになります。何を質問すればいいのかがわかっていない新人記者は言葉だけの説明で満足して突っ込むことをしないために、行き届いた取材ができないのです。図面を書いて再現する手法はほかのことにも応用可能です。何がわからないかが分かれば成功したのも同然。勉強と同じことですね。複雑な事象を書くときには図で再構成することをお勧めします。

●「第一読者」を想定して語りかける

分かりやすい文章を書くというのは実は大変難しいことです。私は新聞社に入社して初任地の広島支局で、原稿を書けども書けども「わけのわからん原稿を書くな」と怒鳴られ、時間をかけて書き上げた原稿はくず箱に叩き込まれました。

2年目に入ってもいっこうに進歩がない。どうすればいいのか悩んだ末、「そうだ、松山に住

んでいるばあちゃんに語り掛けるように書いてみよう。ばあちゃんが喜んでくれるような温かい話も探そう」と思い付いたのです。こう書けばばあちゃんはわかるかな、こんな表現だったら笑ってくれるかなと自問自答しながら原稿をし作り上げていくと、いつの間にかデスクのもとをスムーズに原稿は通るようになりました。皆さん、原稿を書くときは第一読者を想定して、語りかけるように文章を紡いでください。

3. 生き生きとした文章を書くには

●文章はリズムだあっ

そうです。文章はリズムです。私が編集整理のデスクをしていた1995年春に、大リーグ・ドジャズに入団した野茂英雄投手が初登板しました。その時の夕刊の見出しです。

「トルネード、打てねーど」

トルネード投法でバッタバッタと三振の山を築いたときに夕刊デスクをしていた私がつけました。相方の主任さんが「こんなにふざけて大丈夫ですか」と心配しましたが、なに、いいんです、面白ければ。この見出しで少し感じ取ってもらえると嬉しいのですが、いい文章の要点の一つはリズム感を大切にすることです。語呂が良く、バンバンと畳みかけるのです。

せっかくのリズムを台無しにするのが、「私」です。主語は不要。私の大量生産なんて見ていられません、小学生じゃあるまいし…。接続詞もいりません。「だから」「そして」「しかし」「だが」なんて、もちゃもちゃして気持ち悪い。きっぱりと接続詞にはお別れを告げ、行を変えて段落を作ることで接続詞の代用とする「高等技術」、いや、当たり前のテクニックを身に付けましょう。流れるような文章の敵は「私」と「接続詞」でござる、親の仇と思い召されい。

●長々しく書かない

良い文章にはリズムがあります。ジャズのようなテンポの良さ。最近の作家では佐藤多佳子さんの作品には唸らされています。三浦しおんさんもリズミカルな文章が特徴です。

文章にリズム感を出すポイントの一つは長々しい文章を書かないことです。二つ、三つの文章を接続詞でつないだら最悪です。どうしても長い文章になるなら、その直後にポンと短い言葉を入れる。これで文章がだらけるのを防げます。もう一つの心がけ。くだくだしい形容詞を使わないことです。説明調になって文章が重くなる。主語に形容詞をかぶせすぎようものなら頭でっかちになって転んでしまいます。佐藤さんの作品の一部を紹介します。

「一瞬の風になれ」（佐藤多佳子著）から抜粋しました。青春陸上小説として有名です。主人

公は中学まで続けたサッカーをやめ、高校から陸上短距離に転向します。その少し前の場面です。短文で作るリズムに注目してください。

「寝るね」
俺は立ち上がった。一家団欒を唐突に破られて、母さんも父さんもちょっと「え？」って顔になったけど、
「おー、おやすみ」
健ちゃんは笑顔。
俺、ほんとに健ちゃんの笑顔って好きさ。なんか安心する。世の中も人生もいいもんだって確信に満ちているから。揺るがないから。力にあふれているから。
信じてるよ。
でも今日は 70 パーセントぐらい。

現代の作家で一番の名文家と謳われるだけのことがありますね。

●日本語の基本リズムは五七五

今でも？と思うかもしれませんが、根底に流れています。ちと古いかもしれませんが、かぐや姫のヒット曲「神田川」を例に挙げます。

貴男はもう忘れたかしら
赤い手拭いマフラーにして

「貴男はもう」が 6 字足らず以外は 7 字です。この歌を口ずさむときについ「もーう」と延ばしてしまうのも、五七五のゆえんと思います。文章で意識する必要はありませんが、「見出し」では五七五を意識すると心に響き、強く訴える効果を持ちます。
浪曲で有名な「親の因果が子に報い」も、蝦蟇の油売りの口上「さてお立合い」も 7 文字。そして坂本九さんの「上を向いて歩こう　涙がこぼれないように」も七五調です。日本人のリズム感の基本が七五調であることを皆さん、合点していただけましたか？

●大切にしたい季節感

もう一つ大事にしたいことは季節感です。随分前に、毎日新聞の朝刊 1 面に俳人、坪内稔典

さんの文章と浮世絵をコラボレーションした連載「季節のたより」はとても面白い試みでした。季節感にあふれる言葉の数々にあふれていたからです。5 月に登場したのは次の一句でした。

「起立礼着席青葉風過ぎた」

「俳句甲子園」という催しで誕生した句です。作者は当時、高校生。小学校の教室風景を思い出して、不覚にも涙がにじんでしまいました。木造校舎が脳裏に蘇るこの句を小学校の還暦クラス会案内にも使い、大層好評でした。

いい言葉はとてつもないパワーを発揮します。この句の素敵なところは五月の空や、青葉の色を思い起こさせるところです。色のある文章を書け、と、昔作文を習った先生に教えられました。季節のたよりにはこの時期定番のこんな句も登場しました。リズムがいいです。

「目には青葉山時鳥初鰹」

もっとさらりと次のように出された時にはキャーツといいたくなりました。

「緑雨です今くちびるに触れないで」（女性の美しさは初夏に際立つとの詞書あり）

素敵な言葉を書き留めて何かの時に備えてください。

4. 達意の文極意五カ条

① 「…が、…が」つなぎは悪文の元

一つの文章の中に二つも三つものテーマを入れる貧乏性の悪文です。話し言葉なら聞き流せても、文章の世界では禁じ手の一つです。「が」つなぎは前の文章で区切っても何ら問題がないケースがほとんどです。前半と後半を分割することで一つ一つの文章が短くなり、わかりやすくなります。

これと似通ったケースが接続詞の多様。これもよくあります。接続詞を全て抜いてください。つながらないことはまずありません。接続詞が多いと接手だらけの樋のようにギクシャクします。ご注意を。

② 二頭を追うもの一兎を得ず

主語が二つある文章のことです。混乱を誘うよくあるミスです。具体例です。「長年の運動が結実し男子普通選挙法が成立したのが大正 14 年であったが、この前後から婦人参政権獲得運動が活発になり始めていた」

2 つの文章を「が」つなぎにしたため、なんとなくつながってはいますが、すぐ頭に入りません。わけることです。裁判の判決などでよく見かけます。思い切りが悪いのです。

③ カタカナ氾濫　あたま混乱

文章の中でやたらカタカナが多いため、目に突き刺さって読みにくい。文意が伝わらない。カタカナ語を安易に使うことで文意が明確にならないケースもあります。例えば「ツー

ル」。道具といかえればいい話。「営業マインド」なんてあきれかえります。こういったカタカナ語に「和製英語」が加わって、翻訳の際にも障害になります。日本語に置き換えることです。

④ 言い換え五回　良い文章

これは作文の先生に教えられた言葉。例えば「朝刊の紙面に…の文字が躍る」という文章の「躍る」をどう言い換えるか。「ある」「目を引く」「出ている」「浮かぶ」「はねる」「飛び込んでくる」。一番ぴったりくるのは「飛び込んでくる」でしょうか。文章を書いたときに、同じ言葉を次の行にも使うと極めて稚拙になります。言い換えはこのようなときにも重要なのです。言い換えの言葉、ボギャブラリーを増やすほど豊かな文章を書けるようになります。

⑤ うるさい「ます　ます」「た」に変えて

語尾がですます調だとどうしても耳障りです。「だ」「た」は一番「耳障り度」が低い。リズム感も出ます。日本語は語尾で勝負する言語だけに気を配りましょう。最悪なのは「ですます」調と「だ　た」調を一つの文で混在させること。気を付けましょう。

5. 仕上げを丁寧に

●削る

文章コンクールに応募する際も、新聞への投書でも応募規定が 1000 字なら 990 字〜995 字を目安にしましょう。書き上げた文章が規定をオーバーしているときは、「修飾」部分を徹底して削ります。それでも追いつかないときは、全体の中で背景説明など、本筋とあまり関係の薄い部分を外していきます。

●後ろを前に出す入れ替え戦

新聞記事は逆ピラミット構成と言われます。前を大きく、後ろを小さく。書き上げたときに読んだ人に納得してもらうために、そのままの構成でいいのか再検討します。入れ替えした場合に前文がそのままの体裁でいいのかも気を付けましょう。

●口の中で転がせ

書き上げた文章を朗読しないまでも口の中で転がしてみると、必ずやつっかえるところが出

てきます。滑らかにしゃべれないのは固い漢語を使っているためか、ジャストフィットした言葉を使っていないためです。言い換えてみましょう。

6. さらに上達するための心がけ

作文を教えた生徒諸君に言い続けていることはいい文章を書き写すこと、まねることです。書き写すという作業をしていると筆者の文章リズムを自然と覚えることにつながります。動詞の使い方、語尾の強調法、長い文章の間に短い文章を挟むコツ。そういったものが身につきます。私は昔、司馬遼太郎さんの「新選組血風録」を引き写したことがあります。「油小路の決闘」の最後の下り。「どういうわけか、人間の指がぱらぱらおちていた」と締めくくっています。しびれました。

継続する覚悟があるのなら新聞の一面コラムを毎日ノートに書き写すのもよい訓練になります。朝日新聞の天声人語、毎日新聞の余禄、読売新聞の編集手帳。写していくうちにわからない言葉が出て来たら必ず調べて、ノートに書き加えてください。半年続ければ語彙力がどーんと上がります。

追手門学院大学ライティングセンター
学生チューター必携テキスト（案）

2017.8 改訂

豊島眞介

初めに

追手門学院大学ライティングセンターは 2017 年 4 月、8 人の専門教員をスタッフとしてスタートしました。今後、相談が多くなった時を考えると、教員ばかりではなく学生チューターの養成が不可欠となります。

豊島はセンター発足時に、これまでに授業でかかわりがあり、日本語の文章作成に興味を持っている学生 2 人に声をかけて、学生チューター養成に取り掛かっていました。そこで教えてきたことを含め、チューターに必要とされる基礎知識、文章力、相談者への対応の仕方などをまとめました。このテキストに沿って、チューター教育素案もまとめています。

ライティングセンターで支援すること

ライティングセンターでは、相談に来る学生にあらかじめ書いたものを持参することを推奨します。チューターは相談に来た学生からどのような悩みを持って訪れたのかを聞くとともに、持参した文章を読み上げてもらいます。そしてセッションスタート。対話を通して書き手自身が文章の問題点や修正方法に気付くようにチューターは支援していきます。その途中では「とてもおもしろい内容ですね」とほめたり、「全体として言いたかったことは」「構成はどうですか？」などと、助け舟を出して考えさせます。書かれた文章を直すのではなく、書き手を育てるのがライティングセンターの基本です。ライティングセンターでチューターが受け持つ役割は極めて大きいのです。

追手門学院大学ライティングセンターは 8 人の教員が学生の相談に応じる体制でスタートしていて、当面は相談業務に学生チューターがかかわることはありませんが、必要な研修を終えた後はどんどん実務に加わっていただきます。

チュータリングの流れ

① 受付シートへの記入

学部、学生番号、利用の目的、何回目の利用か（A 4 用紙 1 枚）

・ライティングセンター受付に用紙を備え付けて記入してもらい、ウェブサイトでの受付シートはプリントアウト

・個人ファイルを作りそこに受付シートを挟み込む

・チューターは面談前に個人ファイルを読み込んで事前に相談情報を頭に入れておきます

② チューターが紹介され、45 分間の面談スタート

・書き手が用意してきた文章をコピー。チューターはコピーを見ながら、書き手に音読してもらう。音読してつっかえるところはたいていの場合、表現が不適切だったり回りくどかったりで改善が必要。

・その間にチューターは文章のどこに問題があるのかを診断する

＜アカデミックライティングのチェックポイント＞

A．序論、本論、結論で構成されているか

B．タイトルや小見出しは適切か

C．段落ごとに一つのテーマについて書く、パラグラフライティングはできているか

D．内容が整理されているか。主張するときに複数の根拠を列挙することがあるが、それが整理されていないことが多い。

E．二つの文が混在していないか。主語、述語を整理して、修飾関係を明確にすると原因が判明する。主語と述語がねじれていることも多い。主語が二つある文章にも出くわす。

F．正しい接続語が使われているか。

G．論点の飛躍はないか

H．キーワードの設定や扱いが正しいか。文章の途中でキーワードが揺れ動くケースもある。

I．あいまいな表現、構文の誤り、誤字、脱字はないか

J．具体的な事実を盛り込んでいるか、引用を明記しているか

＜エッセーのチェックポイント＞

A．テーマに沿った中身になっているか

B．冒頭でちゃんと「つかみ」をしているか

C．文章の構成は分かりやすいものになっているか、前後入れ替えも

D．具体性に富んでいるか、5W1H を踏まえているか

E．文意は通じるか、書き手だけがわかっていないか

F．リズミカルな文章になっているか、あまりに長い文章は途中で切ることをお勧めする

G．一つの文章の中に二つも三つものテーマを入れていないか

H．主語が二つ混在していないか、主語述語の関係は整理されているか

I．カタカナがやたら多い文章になっていないか

Ｊ．同じ言葉を何回も使っていないか、言いかえを

Ｋ．あいまいな表現、構文の誤り、誤字脱字はないか

③　面談の注意点と流れ

・書き手の思い、何を書きたいかを確認し合いながら面談する

・修正はあくまで書き手にしてもらい、チューターはアドバイスする立場を堅持する

・面談は書き手とチューターの 2 人で作り上げていくもの。やりとりの中で文章の問題点に気づいてもらう

・面談では書き手の書いた文章の良いところを探し出して褒め、そのうえで診断内容を伝え、改善点を話し合う

④　最後に書き手にアンケート用紙に記入してもらい、アンケート回収箱に入れてもらい終了。1 回で終わらない場合は次回の予約もしてもらいます

⑤　チューターは以下のものを個人ファイルに整理して、面談終了。

・受付シート

・書き手が持参した文章のコピー

・面談で書いたチューターのメモ

・チューターの振り返りシート